
雪の継承者

響
響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の継承者

【Nコード】

N8190M

【作者名】

響

【あらすじ】

沢田綱吉の兄 沢田響が並盛にやってきた！？

響やツナなどの仲間たちとの友情、京子との恋愛、などなど

響はいろんなことを並盛で経験していく。

成長の果てに響を待ち受けているものとは！？

響、日本に来る！！（前書き）

お初です！！

このたび初投稿させていただく響と言います！！

REBORNの原作を大事にしたい方

京子はツナの嫁だよという方

オリ主なんて嫌いだ、という方はご遠慮ください

—（——）—

響、日本に来る！！

（プロローグ）

イタリアにあるマフィア・ボンゴレファミリーの本部で、ある男がボスの部屋をノックする。

？「ボス、入ってもよろしいですか？」

？「ああ、大丈夫だ。入れ。」

男が部屋に入ると優しい顔つきの老人がいた。

この老人がマフィア・ボンゴレファミリーの現トップ“ボンゴレ^{（イ）}世”である。

？「ボス、何用ですか？」

？「家光よ、お前の息子も元気に育っているそうだな？」

9代目としゃべっているのは門外顧問の沢田 家光である。

家光「ええ、綱吉も響も元気に育ってますよ。9代目」

家光はともうれしそうに言う。この男、親ばかりである。

9代目「響ここにきて5年になる。ボスの後継者候補が綱吉君だけになってしまった今、彼らを一緒に暮らせて、ボスをとボス補佐の教育したいのだが、どうかね。」

そう眉をひそめながら、9代目は家光に言う。

家光「そうですね… 息子たち同士も久しぶりに会えるので、喜ぶと思いますから、私は賛成です。」

家光も一瞬眉をひそめるが、息子が嬉しがるのが想像できたのかほほを緩ませる。この男、やはり親バカである。

9代目「そうか、ならさつそく手配させよう。家光、響を呼んできてもらえないかね？」

9代目は苦笑しながらも、家光に頼みごとをする。

家光「了解しました！！ では、失礼します。」

家光は、頼みごとを受け、部屋からでて、響がいる部屋へ向かう

家光「ふふ〜ん、響は綱吉と会えるのか、嬉しがるだろうなあ〜。

はっ！！俺は、綱吉や奈々に会えないのかーーーーー（泣）」

家光が泣き崩れていると、向こう側から銀髪のぼさぼさ頭の少年が歩いてきて、

家光に言う

？「父さん、なにやってんの？」

と少年はいう。この子が沢田家光の息子 沢田 響である。

家光「おおー！！ わが愛しのマイサンよ！！ 会いたかったぞお
おおおー！！」

若干壊れ気味で響に飛び込む。

響「やめろおおおー！！」

響は言うと同時に殴りかかった。

ドガッ バキィ ドンガラガッシャーン

響「気色悪いんだよ！！ この屑がッ！！！！」

響は切れて、親父をぼこぼこにした。 “WINNER 響”！！！！

家光「ふいまふえんでふいた。」

と、腫れた顔で謝る。

響「まあいいよ。で、一体何の用なの？」

と、首をかしげながら聞く。

家光「ああ、9代目から話があるそうだ。」

と、まじめな顔で言う。

響「それを早く言えよおおおおおおお……。」

と、言いながら走って行った。

家光「そんな、走っていかなくてもいいじゃん。orz」

「ボスの部屋」
バンッ

響「9代目、失礼するよ!!」

といいながら、部屋に入る。

9「マナーは守るべきじゃぞ。」

と優しく諭す。

響「ごめん、ごめん。で、話って何？」

と笑いながら言う。

9「響よ、綱吉君のいる並盛にいつて、綱吉君と一緒に暮しなさい。」

とまじめな顔で話す。

響「本当ですか？ ツナと会えるのはすごくうれしいので、よろこんでいかせてもらいます。」

とまじめに返す。

9「では、1週間後に、日本に行きなさい。手配はしておくから。」

京「わかりました。では荷造りをしてきます。」

と、部屋を出でいった。

〈1週間後〉

〈空港〉

響「見送りなんていいのに……」

家光「あつちでも元気でやるんだぞ！ いじめにあうなよ？ なんかあつたらお父さんに言えよ？ 絶対にたすけにいつてやるからな
！！！」

響「ハハ……大丈夫だよ。しっかりやれるからさ。」

アナウンス『日本行きのお客様は11号機乗り口に行ってください。』

響「じゃあ、行ってくるね。バイバイ」

家光「ああ、バイバイ（泣）」

こうして響はツナのいる日本：並盛旅立っていった。

響、日本に来る！！（後書き）

プロローグを書きました！！

次回は設定を書きたいと思います

設定（前書き）

どーも今回は設定という事で
ではどつぞ！！

設定

設定

名前 / 沢田響さわだ かなづ

年齢 / 13才（連載当初）

身長 / 168・5cm

体重 / 52kg

好きなもの / 京子 甘いもの 仲間

嫌いなもの / 仲間を傷つける人

性格 / 気さく、だけど、まじめになると、超ツナのようになる

備考 / ツナの兄 武器は大鎌 死ぬ気の炎は、白色 死ぬ気丸所持

ボンゴレ？フリーモ世も同じく双子だった。

顔つきは、You TubeのメルトのツナVERを参考にしてください。

ボンゴレ？デーチモ世はツナ 響はボス補佐とします！！

設定（後書き）

次は響とツナの再開を書きたいと思います!!
では次回をお待ちください

第1話 響、並盛に帰ってくる！？（前書き）

はいー響です！！

執筆しはじめて、小説家のつらさがわかるこの頃です…

ですが、頑張っていけますので、感想・評価をお願いしますー（

ー）

第1話 響、並盛に帰ってくる！？

〈空港〉

響「ふああー、やっと着いた。元気にやっているかな？ こっちの学校でも楽しくやれたらいいな！！」

響はイタリアから日本に12時間かけてやっとついたのだ。あくびをかきながら、電車に乗り換え、並盛に向かう

〈ツナSIDE〉

小学校を卒業して、一週間が過ぎたけど、俺は遊ぶ気力も起きなくて、家でごろごろしていた。

あ、俺の名前は沢田^{さわだ}綱吉^{つなよし}。みんなからダメツナって言われちゃってるダメなやつなんだ。でも、そんな俺にもすごい兄がいるんだ！！響っていう双子の兄なんだけど、とても優しく、いつも助けてくれて、とつてもカッコよくて、大好きだったんだ！！俺たちが小2のころに、父さんについて行っちゃったんだ。
また、会いたいなあ。

？「ツーっ君、お昼ごはんよー」

ツ「わかったあ。今、行くよ。」

俺を呼んだのは、母さんの沢田^{さわだ} 奈々^{なな}だ。いいことがあると、料理をいっぱい作る癖がある人なんだけど、優しい母さんなんだ。おっと、もうそろそろ降りていかないと……

リビングへ

奈「ツーっ君、やっと来たね。早くお昼ごはん食べましょう」

ツ「う、うん、いただきます（汗）」

俺は驚いたよ……だって、すごい量のごはんなんだから、ここまでの量は、今までで見たことないんだよなあ…… どんないいことあったんだろ？

ツ「こんな量作ったってことは、すごくいいことあったの？」

奈「鋭いわね。そうよ、なんとって今日は響が帰ってくるから、もおー楽しみで、楽しみで」

ツ「えっ、ほんとに……？ やった、うれしいな、響とまた会えるんだあ……！」

母さんの知らせで、ものすごいいいことだってわかったと思ったら、ベルが鳴った、響なのかな？早く迎えに行こう……！

ツナSIDE END

並盛駅についた俺は、沢田家に向けて、歩き出した。

響「（ツナ、元気にやってたかなー？ 5年ぶりだから、ほんとに楽しみだ）」

とウキウキしながら、歩いていると、

？「キャー！！」、「ごめんなさい。」

という声が聞こえ、そちらを向くと、中学生二人組の不良に絡まれている、可愛い女の子がいた。

不A「（ぐへへ、レベル高い女だぜ、俺らのものしょう！！）おい、嬢ちゃん、俺らの服がビショビショだよ、責任とってくれよ。」

不B「（うへへ、最高だぜ、俺ら！！）そうだな、責任とってもらおうか。」

下心丸出しの不良たちをみて、響に怒りが溜まってくる。

女「ご、ごめんなさい！！」

女の子は、涙目になりながら謝る。

不A「じゃあ、こっちに來てもらおうか。」

と女の子の手をとって、路地裏に連れ込もうとする。

女「キャ、やめてください!!」

と弱弱しく抵抗する。

不B「おとなしくしやが「そこまでにしろ」れ、ってだ、誰だよ
おまえ!!」

不A「お前には関係ないだろ!!」

響「そうだが、女の子嫌がつてるだろ。やめろよ。」

と響はキレ気味に止めに入る。

不A「うるせえ!!」

と殴りかかる。

女「キャー」

バキイ!!

響「おーいてえな、お前らどうなってもしらねえからな!!」

そして、2対1の喧嘩がはじま・・・らなかった。

バキイ ドカア 不B「やつやめr」 ギャー」 バタツ

響「あと・・・お前一人だ。」

不A「ヒイ、お、覚えてやがれ!!」

ズルズルとBをを引きずりながら逃げていく。

響「君、大丈夫だった? (ニコっ)」

と微笑みながら女の子に問う。

女「(ドキッ) …はっ。はい、だ、だいじょうぶです／＼(かっこいいなあー、なんかドキドキするよ。)」

と顔を赤らめながら、返事する。

響「そっか、良かったあー(ふうー)。じゃあ、俺は、行くね。」

と去ろうとするが、女の子に止められる。

女「待って下さい!! あ、あの、お名前聞いてもいいですか?」

響「俺は、沢田 響だよ。君の名前は?」

女「私、笹川^{ささがわ} 京子^{きょうこ}っています。」

響「うん、かわいらしい名前だね(ニコっ)」

京子「はう…／＼あ、ありがとうございますう／＼」

と京子は顔を真っ赤にする

響「ハハハ、じゃあ、俺は行くね。京子ちゃんも気をつけてね。」

京子「あ、あの、また会えますか!!」

響「また会えるさ。」

そして、響は帰って行った。

響は京子と別れて、家に向かっていた。

響「（あの子、可愛かったなー、また会える気がするよ）」

なんて考えていると、家に着いていた。

響「お、ついた、ついた、懐かしいなー、なんも変わってないな
〜。」

そして、響はベルを押す。

すぐにドアが開き、こう言われた。

ツノ奈「おかえり（なさい）響!!」

響「ああ、ただいま!!」

こうして響の並盛での波乱に満ちた生活が始まった。

くおまけく

京子「／／／（響さん、カッコよかったなー）」

？「京子ー！ごめん待っ・・・た？　ねえ？」

京子「ぼー／／／」

花「銀髪の男の人（ボソッ）」

京子「ボンッ／／／　花！！なんで知ってるの？」

花「さつき、話してるの見ちゃったからさ、黙ってようとおもっただけど…（ニヤニヤ）」

京子「違うからね、惚れてないからね！！」

花「ホントに？」

京子「ほんとに！！」

花「親友の私にはわかるのよ。京子は、あの人に惚れたのよ！！」

京子「あう／／／　やっぱりわかつちゃうの？」

花「あつたりまえよ！！応援するからね。」

京子「ありがと／＼花」

花「いってことよ。」

なんて話があったことは、響が知るよしもない話だった。

第1話 響、並盛に帰ってくる！？（後書き）

今回は、自分の家に帰ってくるまでを書きました！！

そして、その短い間に京子ちゃんも落とすとは、恐ろしい子！？（笑）

次回は、原作に入りたいかと思えます！！！！

ではでは、次回を楽しみにおまちください！！！！

第2話 響、師匠と再開！？ ～前半～（前書き）

どーも、響です！！

1話長いですね…；；

なので、分けて入れたいと思います！！

第2話 響、師匠と再開！？ ～前半～

第2話 昔の師匠来る！？

体育館では、バスケットが行われていた。

生徒A「ツナ！！ボールいったぞ！！」

ツ「へっ？」

ベチャ

ツナの顔に、ボールが直撃する。

ツ「あ、いってー。」

生徒A「おい、ツナ！！なにやってんだよー。」

ツ「ご、ごめん。」

ツナはボーッと立っていたことを謝る。

響「大丈夫か、ツナ？」

響が心配そうな顔で聴く。

ツ「うん、大丈夫だよ！！」

顔をおさえながら、返事をする。

く試合終了後く

生徒A「お前のせいだからなー!!」

とツナに向けて、怒声を飛ばす。

ツ「っ!! ご、ごめん……」

少し、びくつきながら

生徒A「とゆーことでそ・う・じお願いね」

生徒B「俺たちさ、貴重な放課後をたのしみたいからさ。」

とって、笑いながら去っていく。

ツ「ちょ、ちょっと待ってよ!!」

響「お前らもやれよ!!」

響たちが追うと、あいつらはこんなことを言っていた。

生徒A「あいつ、マジだめだなー（笑）。テストは？」

『いつも赤点!!』

生徒A「スポーツは？」

『ダメツナがいるチームはいつも負け!!』

生徒A「マジで不思議だよな。ダメツナとキョウが兄弟なんて、なあ？」

『そうだなー、七不思議一つだ（笑）』

響「おい、待てよ」

と殺気染みながら、追おうとすると、

ツ「いいよ、キョウ。おれはどうせ、馬鹿で音痴だからさ。相手にされないよ。」

とツナはネガティブに陥る。

響「そんなことないって!! あいつらは、お前の魅力に気付いてないだけだからさ。」

とツナを響は慰める。

（響SIDE）

ツナを慰めていたら、外からこんな声が聞こえてきた。

花「もっと積極的になりなさいよ。」

京子「む、無理だよー。だって、話そうとすると、頭が真っ白になっちゃうんだもん!!」

花「だけど、そんなんじゃない、いつまでたっても振り向いてもらえないよ?」

つて、話してる。ふーん、京子ちゃんに、好きな子でもいるのかな? だれだろう?

〽響SIDE END〽

〽京子SIDE〽

花とキョウ君のことを話したら、?
?「おまたせ、京子!!」

京子「あ、持田センパイ。」

つて持田センパイに話しかけられた。持田センパイが花のことをちらちらみてる。好きなのかな?

花「私は行くね、ごめつくりー（ほんとはやダけどね、積極的じゃないからだよ、これ。わかった?）」

京子「もー花ったらー。（う、うんわかったよ、私頑張るよ!!）」

なんて、センパイに気付かれないように話してた。今度会ったら、頑張ろう!!

〈京子SIDE END〉

響は京子と持田が二人っきりなのを見て、イラついていた。

響「（なんだろ、すっげえイラつく）ちっ!!」

ツ「ああー、やっぱり、剣道部主将とできたんだー。orz」

と響はイラつき、ツナは落ち込んでいる。

響「なあ、ツナ？」

ツ「なに？」

響「帰らね？なんかもうつまんないわ。」

ツ「そうだね、帰ろっか。」

〈沢田家〉

響たちが学校をさぼって、家でごろごろしていると、奈々が話かけてきた。

奈々「綱吉、響、学校から、電話があつたわよー。また学校サボっ

たんですってー？ もう、将来が心配よ。」

と奈々が心配しているが、

ツノ響『なんかなるさ（よ）。』

なんて、二人揃って、のんきに返す。

奈々「だからね、家庭教師を雇ったの！！」

とツナたちにカミングアウトする。

ツノ響『はぁぁー！！なんでさ、いらないだろ（よ）！！』

と部屋からでて、抗議する。

奈々「でも、もうよんじやったの」

ツノ響『だから、いらない？「チャオっす」っての・・・誰（リボーン！？）？』

リ「久しぶりだな、キョウ。そして、はじめましてだ、ツナ。」

奈々「ボク、どこの子？」

といつの間にかいた赤ん坊に話しかける。

リ「ん。おれは家庭教師のリボーンだ。」

ツ「ぶっー！！」

奈々「あら、まあ。」

とツナは爆笑し、奈々は驚く。

ツ「この赤ん坊に教わることなんてないよ。響「ツナ、やめといった方が…」へっ？」

ドカツ！！ 赤ん坊に殴られ、ツ「ほむっ！！」バタっ と気絶するツナ。

響「（こわっ！！）母さん、リボーンは優秀だから、下に行つて大丈夫だよ。」

響は若干震えながら、母さんに勧める。

奈々「そ、そう…じゃあ、お願いしますね」

と降りて行つた

（1時間後）

ツ「はっ！！ なんだって、おい、起きろよ！！ 赤ん坊だからって許さないぞ！！」

ツナは怒つて、リボーンを起こそうとする。

響「やめとry」

響が止めようとした時、

クン、バツシーン リボーンはツナのネクタイをつかみ投げる、

ツ「いってー、なんだこのガキー!!!」

とツナはのたうちまわる。

リ「俺にすきはないぞ。本職は殺し屋だからな。」

そっいつて鞆をひらいて、銃を組み立てる。

リ「俺の本当の仕事は、お前をマフィアのボスにすることだ。」

と、リボーンは、ツナに自分が来た理由を話す。

ツ「はあ、マフィアだって!?!しんじられないよ!」

ツナは信じられないらしいが、

響「ツナ、これほんとなんだ…。ツナはマフィアのボス候補なんだよ。」

響がこういので、信じるしかなかった。

ツ「まじかよ…じゃあ、キョウがボスにしたほうがいいよ!」

ツナが一番に思ったことを言うと、

リ「それは、ボンゴレの掟なんだ、双子の候補の場合、弟をボスにするというな、これは初代がそうだったからな、そっいつことになつたんだ。」

初代のボスとボス補佐が双子でボスが弟、補佐が兄だったというのを聴いて、

ツ「まじかよ。」

リ「ある男からな、お前を立派なマフィアのボスに教育するよう依頼されてんだ。」

ツ「やだよ、そんなの。馬鹿じゃないの!？」

リ／響『一発撃つとくか?』

と青筋立てながら、響たちは言う

ツ「なんでキョウまでえー！ー！！」

びびりながらも、ツッコむツナだった。

響「いや、俺も、リボンから、授業受けててな、尊敬してんだ。だからさ、否定されたらさ…なあ？」

リ「ああ、そうだな。」

ツ「じゃあ、キョウはなにを教わってるんだ？」

ふと、浮かんだ疑問をぶつけるツナ

リ「立派なボス補佐になる教育だ。」

響「まあ、そういうこつたな、俺も頑張るからさ、ツナも頑張れよ。」

「

響は、さわやかに笑いながら言う。

グウウー

リ「あはよ」

リボーンの腹が盛大になると、リボーンは、出ていく。

ツ「どこ行くんだよ!」

響「まあまあ、落ち着いてさ。」

響は、イラついてるツナをなだめる。

ツ「キョウ、俺出かけてくるわ。」

と言うと。

響「俺も、ついて行っていいか?暇でさ……」

とあくびをかきながら、言う。

ツ「まあ、いいよ。」

承諾したツナと響は下におりていくのだった。

くりびんぐ

ツ「母さん、キョウと出かけてくる。」

奈々「ご飯は？」

とツナたちに聴く。

ツ「知らない、外で食うから、金頂戴。それと、あの家庭教師だけど……」

奈々「ん？リボン君はね、ツナの成績があがるまでの住み込み契約なの。キョウは、ついでにみてくれるんだってさ。」

と満面の笑み浮かべて言う。

ずってーん

ツ「マジですかぁーーーー！！！！」

後半へ続く

第2話 響、師匠と再開!? 〳前半〳(後書き)

今回は、リボンとの並盛での出会いを書いてみました!!!
次回で、1話を終わらせたいと思います!!!!

キョウVS持田はどうなるのか!?

期待して待って下さいー(ーーーーー)

第2話 響、師匠と再開！？ ～後半～（前書き）

はい、後半をかきました！！

やっぱり大変ですね！！

でもこれからも頑張っていきますので、応援よろしくお願いします！！

第2話 響、師匠と再開！？ 後半

後半

ツナたちは、ぶらぶらと散歩をしていた。

ツ「キョウはまだしも、なんでお前までついてくんだよ!!」

リ「いいじゃねえか。殺すぞ」

とツナに銃を突きつける。

ツ「なんでそうなるんだよ!？」

響「リボーン、やめてくれよ。」

なんて話していると、前から、京子がやってきた。

ばっ!!とツナが隠れる。

京子「あ、キョウ君、授業どうしたの、出てなかったけど? って
その子、可愛いねノノノ」

響「ん、ちよつとね……」

リ「ちやおっス」

京子「そっかあ。ねえボク、どうしてスーツ着ているの?」

とリボーンの目線に合わせてしゃべる。

リ「マフィアだからな」

京子「わあー、かつこいいね。頑張つてね、バイバイ」

響「ん、じゃあな。」

と、京子は帰って行った。

ツ「あいつ、いきなり京子ちゃんに気にいられてるよー」

響「まあまあ、落ち着けて。」

憤慨するツナをなだめる響。

リ「マフィア、モテモテ」

響「（イラッ）それは、ないんじゃないか？」

にやりと笑っていうリボーンに、イラッとする響。

リ「ふっ、否定できないだろ。それは、お前が妬いてるからじゃないのか？」

からかうように言うリボーン。それにまた響はいらだちを募らせる。

ツ「（えっ！？キヨウは京子ちゃんのが好きなの？）き、キヨウ、ホントなの？」

とツナは不安に思いながら、訊く。

響「わかんないけど、今と持田としゃべってたときも、イラッとしたな。」

思い出しながら、しゃべる響。その時を思い出したのか、眉をひそめる。

そして、ツナが顔をうつ向く。

ツ「（やっぱり、好きなんだ京子ちゃんの事）はあ〜」

リ「それを、やきもちっていうんだぞ。」

響「そうなのか〜、これがやきもちねえ〜」

なんとも、釈然としない顔で返す。

ツ「はあ〜」

リ「そうだぞ、だから、行って来い」

と響を急かす。

響「ちょっと、待てよー！！ いまから、やだよ。ってツナ？どうしたんだ、暗い顔して？」

ツ「なんでもないよー！！ 頑張ってね、応援するよー！！」

心配そうに訊かれたツナ、作り笑顔をつくって言う。

リ「早く行けよ。俺が素直にさせてやる。」

銃を響に向けて

「や、やめろ。あれだけは“バーン”がつ!!」
撃った

ツ「おい!!何やってんだよ!!」

リ「まあ、いいから見てろよ」

地面に倒れていた響が額に炎をともらせ、いきなり立ち上がる。

響「…俺は、京子が…好きだ…」

と言うと、急に走り出す。

ツ「え、え?キョウどうしたんだ?」

状況についていけないツナ、響が走り出したことの意味がわからないのか、首をかしげている。

リ「ツナ、キョウを追うぞ。」

ダダダッ リボーンも走って行ってしまう。

ツ「ちょ、待ってくれよ」

タッタッタ ツナも響たちを追っていった。

〈響SIDE〉

ドドド

ああ、理解したこの気持ち、これは京子が好きだってことなんだな。だから、持田としゃべってた時も、リボーンに関心がいつた時、いらだったんだ。

ああ、この気持ちを京子に伝えよう!!
どこだ、どこにいる!!

ドドド

〈響SIDE END〉

それからしばらくして響はまだ走っていた。

ドドド

持田「なあ、京子。」

京子「なんですか？先輩（キョウ君にどうやって近づこうか考えてたのに!!!!）」

ドドド

持田「今度、デー」…見つけた…」げふう」

持田が覚悟を決めて、誘おうとした途端に、誰かに蹴り飛ばされる。

持田「誰だよ!!」

と顔を上げると、そこにいたのは、響だった。

京子「キヨウ君!？」

響「…」

じつと京子の顔を見る

京子「キヨ・ウ・君?／／／」

いつもは気さくな響が無口で真面目な顔をしているのに顔を真っ赤にして驚く京子

京子「ボー／／／（いつもと違う真面目な顔で、私のことをじつと見てるよ）。ど、どうしょ!!」」

持田「お前、一体何の用だよ!!!いきなり現れやがって。（俺が頑張って、決めようとしたのに!!）」

響「…京子に…言いたい事…あるんだ」

京子「え、私!?!／／／」

響「ああ…俺は、「待って!!」…?」

告白しようとした、響だが、京子に止められる。

響「どうした・・・?」

京子「あのね、まだ心の準備ができてないから、言うのは明日でもいい／＼／?」

と手をもじもじさせながら上目づかいで言う。

響「!!!…わかった／＼／」ダッ

それを直視した響は、顔を真っ赤にして、逃げて行った。

京子「ふう。先輩、私帰りますね。（ちゃんと話せるように心落ち着けとかないと!!）」

と持田を残し、顔を真っ赤で去っていく京子

持田「待ってくry。沢田あー覚えてろよ!!」

と一人捨て台詞をはいて去っていく。 あわれwww

くツナSIDEく

ツ「キヨウ、どこいったんだろ？」

俺は、急に走って行ったキヨウがどこにいるか、探し回っていた。

リ「そんな遠くには、行っていないはずだ。」

ツ「そつか。ってあれなんだよ、キヨウの頭撃ち抜いてたのに生きてるなんて、おかしいだろ！！」

俺は、あの時の摩訶不思議な現象について、リボーンに訊いてみたんだ。

リ「あれは、死ぬ気弾というんだ。」

ツ「はあ、死ぬ気弾！？」

リ「あれは、死んだ時に思っていた、未練を死ぬ気で行動に移すもんだ。」

ツ「ってことは、死んだ時に、キヨウはなにを未練に思っていたんだ？」

その摩訶不思議現象は理解できたんだけど、キヨウは何を思っていたんだろ？訊いてみようか。

リ「それは、だ「京子への気持ちだよ、ツナ」だそうぞ。」

ツ「き、キヨウ！？何してんたんだ？」

突然現れたから、びっくりしたよ……で何してたか訊くと、

響「京子に告白しに行ってた。」

ツ「へえー京子ちゃんに告白ねえー…って告白っ!？」

まじかよ!?!やばいじゃん、やばいよ!?!? 俺も、京子ちゃんのこと好きなのに!?

リ「で、どうだったんだ？」

そ、そうだよな、結果が気になるよ!!

響「明日に保留になった。」

それって、期待大じゃん!?

リ「そっか、よかったな。じゃ、帰るぞ!!!」

響「ああ、そうだな///」

とリボンとキョウが帰っていくよ。

ツ「ああ ！！まってよー」

でも、キョウがあんな幸せそうな顔するんだ、俺は、応援しよう!!

くツナSIDE ENDく

（翌日）

並盛中にて

響が教室に入ろうとすると、
ガシッ！！
と腕を掴まれた。

響「なんだよ？」

生徒A「持田先輩が、呼んでるぞ。道場で待ってるってさ。」

響「わかったよ。道場だな。」

と響は道場に向かって歩いて行く。

『なんだ、なんだあ！？　なんか、面白そうだな！！行ってみようぜ！！』

と野次馬精神でぞろぞろと道場へ向かっていく。

花「持田先輩、昨日あった事の復讐だつてさ。」

京子「えっ！！　花、行こ！！」

花「う、うん。」

花は京子の剣幕に驚きながらも、ついて行く。

「道場」

「持田SIDE」

昨日の屈辱は忘れないぞ！！沢田 響！！

ガラッ 響「失礼しまっす」

持田「来たな！！昨日のことで決闘を申し込む！！」

響「わかりました。でルールは？」

くくく、乗ってきたな、京子の前で恥かせてやるぜ！！

持田「ルールは単純、10分間で1本でも俺から取れば、お前の勝ちだ。賞品はもちろん、笹川 京子だ！！」

京子「しょ、賞品！？」

花「最低ね」

響「…着替えてきます…」

あいつに勝てるわけがないんだ！！あいつが使う防具、竹刀には2

人で持つがやつとのウエイトを埋め込んだ。そして、なにより、審判は俺の息がかかっている。俺の勝ち揺るがない！！

持田「ふはははははははははは！！」

響「お待たせしました、これかなり重いんで付けなくてもいいですか？」

持田「！！ああ、大丈夫だ」

まさか、ばれたのか！？いや、それでも俺の勝ち揺るぐはずがないんだ！！！！

響「そうですか。なら、始めてください。」

部員A「試合開始！！」

持田「俺が手加減すると思っただのか？ブア力が！？」

これで俺の勝ちだ！！

（持田SIDE END）

（響SIDE）

防具付けてみたけど、ふつうの重さじゃなかった、そこまで勝ちたいのかね。まあいいつけなくて出て、あいつに絶対勝つだけだ！！

あいつは京子を賞品扱いしやがった！！だから、絶対ぶっ飛ばす。

部員A「試合開始！！」

持田「俺が手加減すると思っただのか？ブア力が！？」

そう来ることはわかってた！！

響「遅い！！面！！」

スパーン

俺はやつの右へ避けて、きれいに決めた。でも、審判は、旗を揚げねえ。やっぱりか、ならあいつにギブアップさせるまでだ！！

持田「なぜ！？避けられただど？」

響「…取り消せ。」

スパーン

と俺は言いながら、右腕に2回当ててる。

持田「！！な、なにをだ？」

響「…京子を物扱いしたことをだ。」

スパーンと、今度は胴に決める。

持田「う、うるさい！！」「…なら、もうしゃべるな」ひい　おい、加藤あれをやれ！！」

響「…？」

不思議に思っていると、ツナが人質になっていた。

加藤「キョウ、動くんじゃねえぞ！！ツナがどうなるかわかんねえぞ！！！」

ツ「ひい い！！ごめん、キョウ。」

響「・・・卑怯な。」

ふざけるな！！こんなのないだろうが！！まじで殺意が湧いてきたぜ
リ「こんなときこそ、俺の出番だな。」

カチャ ズキーン

音が聞こえたと思ったら、ツナの額が撃ち抜かれていた。

『キヤあああああああああ』

ツ「リ・ボーン！！！！死ぬ気で前らをぶっ飛ばす！！！」

ツナの死ぬ気で部員（審判・持田除く）がぶっ倒される。

響「これで…一対一だ」

ここまで卑怯なことをしたんだ、わかってんだろっな？

持田「くそお！！だが、それでも、勝つのは俺だーーーー！！！」

と俺に自棄になって向かってくる奴の後ろに回って、手刀を決めて
気絶させる。

響「俺の勝ちだよな（黒笑）」

部員A「勝者 沢田 響！！」

『わあああああ！！！！』

審判が勝ちを宣言すると、まわりから喚声があがった。

そして、俺は京子のもとへ歩いて行く。

一歩一歩歩いて行きたびに周りが静かになっていく

そして、京子の前へ辿り着いた。

〈響SIDE END〉

まわりが静けさを保っているのを破ったのは、響だった。

響「京子」

と京子と呼ぶ。

京子「はい／＼／」

京子は、顔を赤らめながら、返事をする。

響「俺、沢田響は笹川京子のが好きです／＼。付き合っても
らえませんか？」

響が赤くしながら、自分の気持ちを京子に伝える。
響にとってこの待ち時間が何時間にも感じた。

京子「は、はい／＼私、笹川京子も沢田響のことが好きです！！
よ、よろしく願いします！！！」

京子は、涙をぼろぼろこぼしながらOKをだす。

響「京子！！」

といいながら、抱きしめる。

京子「響君／＼」

京子もそっと抱きしめ返す。そして、お互いに見つめあい、顔を近づけていく。

そして、みんなの前で、二人の影が重なった

くおまけく

『ひゅーひゅー お熱いねえ!!』

響／京子『／／／』

『おめでとー！ー！！！！』

響／京子『あ、ありがとう／／／』

なんてこのカップルは祝福されていた。

第2話 響、師匠と再開！？ ～後半～（後書き）

どうもー初戦闘描写（？）でした。

まだまだ拙い文だと思います！！精進します

京子と恋仲になりました！！（てへっ 気持ち悪いwww
次は獄寺を出します！！

では、次回もお楽しみくださいー（――）ー
感想・評価お待ちしております。

お詫び

申し訳ありません!!

いまリアルの方が忙しいのでまだ更新することができません orz

9月のなか頃になれば、多分、落ち着くと思うので、それまでお待ちくださいー(――)ー

ちゃんと構想はねってありますので、落ち着き次第更新という形になると思います。

これからの展開を頭の中で妄想しつつ、リアルの方を片づけていきたいかと、そして、駄文ですが、自分の力をMAXにフル活用して頑張っていきたいと思います。

もしかしたら、今度、アンケートをとるかもしれません。その時は、なにとぞご協力をお願いします!!

これからも雪の継承者を執筆していきますので、よろしく願います!!

スモーキン・ボム来る

～教室～

とある日の並盛中のHRでは、

先生「え、今日は転入生が来ている。静かにするように」

男「先生！！男ですか？女の子ですか？」

先生「男だよ。では、獄寺君はいつて」

ガラッ

ドアを開けて入ってきた男は教室に入ってくる。

先生「イタリアから、転入してきた獄寺 隼人君だ。」

女子「ちょ、カッコよくない!？」

女子は、獄寺の顔立ちに黄色い歓声を上げる。

ツナ「（ふん、あーいうのが、いいんだ）」

『（隼人！？なんで・・・ああ、あいつが来たのは、リボーンのせいだな。）』

ツナが獄寺のことを見ていると、目が合い、ギロッと睨まれる。

ツナ「（な、なんだよ。）」

とツナがおびえていると、獄寺はツナのところにやってきて、机を蹴っていく。

ツナ「（なにすんだよ。目があっただけじゃないか）」

『（ははっ。やっぱ、あいつは変わんないな）』

ツナが憤慨しているのに比べて、キョウは懐かしく思っていた。

男子A「ツナ、知り合いか？」

ツナ「知らないよ!!」

男子B「あいつ、不良確定だな」

男子は獄寺の行動にビビっていた。

女子A「でも、そういうところがしびれる」

女子B「ファンクラブ結成決定ね!!」

逆に、女子は、そういう行動に、メロメロになっていた。

〜HR終了後〜

ツナ「なんだよ、あの転校生。ああいうノリにはついていけない
」。キョウもHR終わったらどっか行っちゃうし」

などと愚痴りながら、歩いていると、ドン！！と何かにぶつかる。
ツナが顔を上げると

不良A「おお、いてー 骨折したかも」

ヒヒヒヒ

と笑いながら、ツナに言う。

ツナ「ごめんなさい！！ごめんなさい！！」

と言いながら、中庭に逃げていく。

ツナ「ふうー、あぶねー、下手したら半殺しだったよ。」

なんてツナが息をついていると、誰かに話しかけられた。

？「目に余るやわさだぜ。」

ツナ「！ き、君は転入生の・・・！そ、それじゃ、これで」

話しかけてきたのは、転入生の獄寺 隼人だった。それに気付いたツナは、そそくさとその場を去ろうとする。

獄「お前みたいなカスをボンゴレ10代目にしたら、ボンゴレファミリーもおしまいだな。」

ツナ「え！？なんで、ファミリーのことを？」

とツナとキョウしか知らないことを言ってきたのでツナは驚く。

獄「俺は、お前を認めない、10代目にふさわしいのは、キョウさんだ！！」

ツナ「なんだよ急に！そんなこと言われたって。ってか、キョウのこと知ってるの！？」

ツナは、ファミリーのこと、キョウのことなど、訊きたいのがありすぎて混乱する。

獄「前から見ていたが、やっぱり、キョウさんのほうが優れているとは思えない。だから、お前が消えれば、キョウさんが10代目になるんだろ？だから、消える。」

と言って、ダイナマイトを取り出し、点火する。

ツナ「え！？ばばば、爆弾！？！」

獄「あばよ」

そういつて、ダイナマイトを投げるが。

ツナ「うわあああああ」

ズキュウウウン

何かに撃たれて、導火線と爆弾が切り離される。獄寺は舌打ちして、音が聞こえた方に顔を向ける。

リ「チャオっす」

『おひさ、隼人』

ツナも声が聞こえた方に顔を向ける

ツナ「リボーン！！ キョウ！！」

そこにいたのは、リボーンとキョウだった。

リ「思ったより早かったな獄寺隼人」

『あ、やっぱりリボーンが呼んだんだ』

ツナ「ええ！？知り合いなの？」

キョウとリボーンがそう言ってるのを聞いて、驚くツナ

リ「ああ、おれがイタリアから呼んだ、ファミリーの一員だ。会
うのは、初めてだけだな。」

『俺も、知ってたよ。あつちで暮らしてたんだ、知らない方おか
しいだろ。しかも、^{タメ}同じ年だからって会わされたんだ』

ツナ「じゃあ、こいつマフィアなのか！？」

キョウとリボーンの話に驚きっぱなしのツナ

獄「あなたが、9代目が最も信頼する殺し屋^{ヒットマン} リボーンか。そして、お久しぶりです、キヨウさん。貴方を10代目に見せますからね。待って下さい」

『ありがとう。でも隼人、ツナの良さをわかってないからそんなことがいえるんだよ。』

ツナ「キヨウ！？何言ってるの？（ええ！？リボーンってそんなにすごいやつだったの？それと、獄寺君にここまで尊敬されるキヨウって…。それに、俺はそんなにすごくないよっキヨウ！）」

獄寺が言っていることと、キヨウの評価に考え込むツナ

獄「そうですか。でも、こいつはキヨウさんとはちがって軟弱すぎます！！だから、こいつを殺して、キヨウさんが10代目に内定させます！！ そうしてくれるんだよね？」

リ「ああ、本当だぞ。 んじゃ殺し再開な。」

ツナ「はあ！？何言ってるんだよ！！俺を殺るなんて冗談だよな？」

リ「本当だぞ」

リボーンが言ったことに食いつくツナににべもなく返すリボーン。

ツナ「なっ、まさか、俺を裏切るのか？リボーン！！今までののは全部ウソだったのかよ！！」

それに怒るツナにリボーンはこう返す。

リ「ちがうぞ。戦えって言うてんだ。」

といって、死ぬ気弾を撃とうとするリボーン

ツナ「俺が戦う！？じよ、冗談じゃないよ！！キョウ何とか言うてよ」

リボーンの言うことが信じられないツナはキョウに助けを求める。

『ああ、悪い、このことに関してなにも手出しするなってリボーンに言われてんだ。』

ところが、キョウは、手出しできないとツナのSOSを受け取らない。

ツナ「そんな、こうなったら！！」

と言って、逃げだすツナの前に獄寺がさえぎる。

獄寺「待ちな」

ツナ「うわあ！！」

立ちふさがった獄寺はたくさんのたばこをくわえ、その火種でダイナマイトに火をつける。

ツナ「なあ！！」

驚くツナにリボーンが淡々と解説をする。

リ「“獄寺隼人は、体のいたる所にダイナマイトを隠し持った人間爆撃機だ”って話だぞ。又の名を、スモークキング・ボム・隼人」

『ああ、俺もあれにはびっくりしたよ。どこにダイナマイト持ってるんだろ?』

なんてキョウは首をかしげている

ツナ「そ、そんなの、なおさら冗談じゃないよ!!」

と言って、また獄寺から逃げてい途中で 獄「果てろ!!」 という声とともに、ダイナマイトがツナに向かって投げられた。

ツナ「どひゃあ」

と奇声を上げ、爆風に吹き飛ばされるが、それでも、逃げ続けてたどり着いたのは・・・

ツナ「い、行き止まり!! ウソ!!」

獄「終わりだ!! 果てろ!!」

そして、窮地に陥ったツナをリボーンは

リ「死ぬ気で戦え」

と言って、死ぬ気弾でツナの額を撃ち抜く。

『ツナ、頑張れよ』

とキヨウも真面目な顔をしながら応援する。

ツナ「復活……！死ぬ気で消火活動……！」

額に炎をともし、死ぬ気で飛んでくるダイナマイトを手で火を消していく。

ツナ「消す！消す！消す！消す！消す！消すうー！」

獄「なっ!？」
2倍ボム!」

と全部、消された獄寺は最初の2倍のダイナマイトを投げる。

ツナ「消す！消す！消す！消す！消す！消すうー！」

これもすべて消していくツナ。

獄「なら！！3倍ボム・・・！！」ポロっしまっ！！（ジ・エン
ド・オブ・俺…）」

全部消された獄寺は最初の3倍のダイナマイトを投げようとするが、ダイナマイトをこぼしてしまう。

ツナ「消す！消す！消す！消す！消す！消すうー！」

絶望に襲われていた獄寺を救ったのは、死ぬ気で消火活動していたツナだった。

ツナ「ふうー。何とか助かった。大丈夫だった？」

獄「！！（殺そうとしたのに俺の心配をしてくれた！？）“ガッ”
御見逸れしました！！貴方も、ボスにふさわしい！！」

『（やっぱ、ツナはすごいな。気付いたら、引き込まれてる）』

ツナ「！？？」

助かったことに安堵しているツナに、土下座して、大声を出して、
ツナに言う獄寺。

獄「キョウさんが継がない今、10代目はあなただ！！10代目！
！貴方について行きます！！」

ツナ「はあ！？」

目を輝かせて、言う獄寺の言葉に驚くツナ。

リ「負けたやつが、勝ったやつの下につく。それがファミリーの掟
だ。」

『やったな。ツナ！！』

ツナ「ええー！！」

獄「最初は、キョウさんが10代目になるべきだと思ってました。
なのに、キョウさんは継ぐと言わないし、ボス候補はキョウさんじ
やないんでどんなにやつか実力を試したかったんです。あなたは、
俺のために身を挺して、救ってくれた。だから、俺はお二人に命託
します！！」

『ボスはツナだからね、だから、ツナに命託してよ、俺の命もツナに託してんだ。』

獄寺が言った、“二人に託す”に反応して獄寺に言うキョウ。さりげなく、自分の命も託すキョウであった。

獄「そうですか。なら、10代目！！貴方に命を託します！！」

ツナ「いいよ・命託すなんて、獄寺君もキョウも。ふつうにクラスメイトじゃダメなのかな？」

命託されることになって焦ったツナは、なんとか回避しようとする。

獄ノキョウ「そーはいきません！／ダメだよ」

しかし、二人に即拒否される。

ツナ「（怖くて、言い返せない；。つか、なんなのこの状況。）」

とツナが心の中で思っていると、

リ「獄寺が部下になったのと、キョウがお前をボスの器があると認めたのは、お前の力だ。よくやったな。」

ツナ「何言ってたんだよ／／／」

と、リボーンが言ったことに照れていると、

？「ありやりや、サボちゃってるよ。こいつら」

という声が聞こえて、振り返ると、不良達がいた。

不良A「お仕置きが必要かな？」

不良B「サボっていいのは、3年からだぜ」

不良C「何本前歯折って欲しい？」

なんて笑いながら、ツナたちに言う。

ツナ「(ゲッ!?!やばいよ!!)」

獄ノキョウ『俺に任せてください!!/俺に任せろ!!』

獄「消してやらーーーーーーー」

と獄寺はダイナマイトを構えて

『叩き潰す!!!』

とキョウはファイティングポーズをとる。

ツナ「ちょ!?!だめだってキョウ、獄寺君!!」

と必死に止めようとするツナ。

ツナ初めてにして、ファミリィ2人GET!!

結局、ぼこぼこにされた不良達だった。

全『な、なんで俺たちが…』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8190m/>

雪の継承者

2010年10月10日16時58分発行